

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770002

研究課題名(和文) 19世紀後半のフランスにおける自由論と自我論 その交錯と展開

研究課題名(英文) Theories of Liberty and Self in 19th century France

研究代表者

村山 達也 (Murayama, Tatsuya)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50596161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、十九世紀後半のフランス哲学、主にベルクソンを対象に、自由の定義不可能性、道徳哲学それ自体の成立可能性、記憶の潜在性などの主題における自由論と自我論について調査・考察を行なった。それぞれ、ベルクソンにおいては、自由が定義不可能であるのは自由概念が還元不可能な最単純観念だからであること、行為者の自由を前提しないかぎり知性も自己意識も道徳的行為の成立要件ではないとベルクソンが考えていること、ベルクソンの言う「潜在的」は、修飾する語句に応じて、「可能な」と「意識に現前していない」という意味をもち、どちらの用法も、知覚論や精神の存在証明において重要な理論的役割をもつこと、を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research examines Bergson's thesis about the indefinability of liberty, his theory of moral agent, and his concept of virtuality. The following conclusions were drawn: (1) according to Bergson, liberty is indefinable because it is known only by acquaintance and, therefore, the notion of liberty is one of the simplest; (2) according to Bergson, the necessary conditions for us to be moral agents neither include intelligence nor self-consciousness; and (3) Deleuze claims that the Bergsonian concept of virtuality is tightly connected with creation and in stark contrast with that of possibility. However, this interpretation has almost no textual evidence. In Bergson's *Matter and Memory*, the term 'virtual' means 'possible' if it modifies the noun 'action', and it means 'absent from consciousness' if it modifies the noun 'recollection'. These two usages have important theoretical roles in Bergsonism, which are aptly ignored by Deleuze.

研究分野：近現代フランス哲学

キーワード：ベルクソン 定義 自由 自我 潜在性

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者自身の学術的背景

申請者は以前、ベルクソンの『意識の直接与件についての試論』を中心的なテキストとして、彼の自由論を主に研究していた。その成果は二〇一〇年に博士論文としてまとめられたが、その過程で、十分に掘り下げることのできなかった課題がいくつか残された。そのうちの 하나가、ベルクソンの自由論の重要な一部をなしている、「自由は定義できない」という主張が、正確に言って何を意味しているのかという問題であり、また別の 하나가、ベルクソンの自由論と自我論とは、ベルクソン哲学全体のなかでどう結びついているのかという問題である。

どちらについても、本研究の直前に代表者として行っていた科研費研究において、中心的な課題としてではないが、間接的な仕方、継続して考察を行っていた。

前者については、ベルクソンの定義論という大きな枠組みを設定し、そのうえで、彼の『笑い』という著作は定義に関してどのような方法を採用しているのかという問いのもとに検討した。この検討はそれ自体としては大きな成果を上げたものの、「自由は定義できない」という主張との関係はそれほど強いものではなく、やはりこの主張はそれ自体として取り組まれるべきであることが分かった。すなわち、哲学における定義についてベルクソンがどのように考えていたのかを、それ自体として包括的に調査し、まとめたうえで、その成果を背景に当該の主張を明らかにすべきだ、ということである。

後者については、『笑い』における社会論(道徳論)と情動論、ならびに、『道徳と宗教の二源泉』における情動論の検討を行なうなかで、社会や情動といった事象において自由と自我とがどのような関係を結んでいるのかを考察した。こちらについても、本筋の検討自体は一定の成果を上げたものの、道徳論や記憶力理論との関係のもとで、例えば以下のような問いのもとに、なお研究を続ける必要があることが分かった。すなわち、道徳的行為において自由である/ないとき、自我はどのようなものとして存在している/経験されているのか、あるいは、ベルクソンによれば(ある意味で)私たちの実体をなすところの記憶とはどのようなあり方をしており、そのあり方と自由行為とはどのような関係があるのか、といった問いである。

以上をまとめれば、ベルクソンの定義論の広範な調査と、それにもとづく、「自由は定義できない」という主張の考察、ならびに、道徳論や記憶論における、自由と自我との関係についての考察、である。こうした問いを、間接的ではなく直接に考察する必要性が、本研究を遂行する上での申請者自身の学術的背景をなしている。

(2) 広い学術的背景

ベルクソン研究においては、一九九〇年代以降、講義録をはじめとする新資料の公刊や校訂版の出版などが相次いでおり、これまでのスタンダードな解釈(グイエ、ジャンケレヴィッチ、ドゥルーズなど)を乗り越えようとする新たな研究の動きが生まれつつある。そうした研究は当然ながらさまざまな動向をもつが、大きく言えば、新資料を踏まえつつベルクソンの歴史的な位置づけを更新ないし精密化しようとするものと、ベルクソンの主著それ自体に新たな解釈を加え、斬新な読み方を提示しようとするものの、二つに分けることができるだろう。

申請者はこの二つのうち、前者の方向にまずは掉差しつつ、この二つとはまた別の方向がベルクソン研究には欠けており、かつ必要不可欠であると考えた。すなわち、歴史的な文脈の解明を行ないつつ、同時に、斬新でとすると奇抜な視点をあえて提示しようとするのではなく、ベルクソンが行なっている議論やもちいている概念そのものを明確化し、彼の議論を再構成したうえで、その妥当性を評価するという方向である。

後者のような研究方法においては、現代の視点を過去の哲学者にただ押しつけ、そのことによって本来のあり方を歪めてしまうという危険は確かに大きい。だが、歴史的な文脈の解明を同時に行なうことによって、そうした時代錯誤の危険を、完全にではないにしてもかなりの程度まで回避することができるように思われた。また、たとえ多少は歪めてしまうことになるとしても、いったんは、現代の哲学の知見も用いつつ、できるかぎりの議論の明確化を行なうことは、ベルクソンの議論がもつ、哲学としての意義を解明することに繋がるのではないかと思われた。

以上をまとめれば、一方では、新資料も活用した歴史的な位置づけをなそうとする研究が、ベルクソン研究における既存の大きな動向としてあり、他方では、ベルクソンの議論の(現代哲学の知見も生かしつつなされる)明確化と再構成をしようとする研究が、これまでの研究には欠けている。これが、本研究の広い学術的背景をなしている。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえつつ、申請者は本研究の目的を次のように定めた。

(1) ベルクソン自由論の根幹にある、「自由は定義できない」という主張の解明

一般に、ベルクソンは言語や知性的認識を忌避する哲学者だと考えられている。本研究が解明しようとしている、自由の定義不可能性についての言明も、こうした印象を助長しているだろう。そして実際、ベルクソン哲学のなかにもそうした側面があることは否定しがたい。しかし他方で、ベルクソンの著作にお

いては、知性的認識を重視しているような主張も散見される。

問題は、ベルクソンについての以上のような（矛盾しているように見える）二つの印象が、どちらも、断片的な発言をもとにした印象に過ぎないということである。それゆえ、まずは、ベルクソンの全著作を対象として、ベルクソンが定義についてどのように考えているのかを、その背景にある哲学史上の伝統も踏まえつつ明らかにしなくてはならない。そしてその成果をもとに、自由の定義不可能性をベルクソンが主張するとき、そこで彼は「定義」という語のもとに何を考えているのか、なぜそうしたかたちでの定義では自由を捉えることができないのか、を明らかにしなくてはならない。これが、本研究がまず最初を目指した目的である。

(2) 道徳的な行為において自由と自我とがどのように関係しているかの解明

ベルクソンは『道徳と宗教の二源泉』の第一章において、ベルクソンの意味での自由を失い、ただ習慣的に道徳に従っている状態の自我を「社会的自我」と名づけ、一定の考察を行なっている。この「社会的自我」論について検討することは、道徳的行為という比較的具体的な場面において「自由である／ない」と「自我である／ない」とがどのような関係のもとにあるのかを明らかにすることに繋がる。よって本研究では、ベルクソンの社会的自我論を、道徳的行為者が成立するための条件をめぐる考察として読解したうえで、その行為者において自由と自我とがどのように関係しているのかを明らかにすることを目的とした。

(3) 記憶論において、自我の存在様態が自由はどう寄与しているかの解明

ベルクソン『物質と記憶』においては、一方で、自我の実体は記憶であるとされ、他方で、その記憶の本質的なあり方が「潜在的」という言葉で形容されている。そして、この「潜在的」という言葉は、とりわけドゥルーズによるベルクソン研究において、ベルクソンの哲学の根幹に位置するものとされている。記憶が潜在的であるからこそ、自我は自由たりえており創造的たりえている、といった主張が、最も影響力のある解釈によってベルクソンに帰されているわけである。

こうした事情ゆえ、記憶の潜在性という主題には二つの眼目がある。すなわち、第一にこの主題は、自由論と自我論の両方に深く関係しているため、潜在性概念を研究することによって、ベルクソン哲学において「自由であること」と「自我であること」とがどのように結びついているのかを解明することができるように思われる、という眼目がある。また他方で、潜在性概念は、最も支配力の強い先行研究における鍵概念であるので、この概念を批判的に検討することは、これまでの研

究をある程度まで相対化し、新しい解釈を提示するための準備作業となりうる、という眼目もあるのである。

こうして、『物質と記憶』における潜在性概念の検討を通じて、ベルクソン哲学における自由論と自我論との結びつきを考察することもまた、本研究の目的である。

なお、以上にあわせて、デカルトとパスカルを中心とする近世哲学についても研究を行なった。それは、ベルクソンの定義論が近世哲学の定義論を下敷きとし、それを大きく引き継いでいるように思われたこと、また、自由論と自我論との交錯という論点において、ベルクソンと対比させると興味深い論点が数多くあり（自由であることと自我であることとの関係、道徳と習慣の関係など）本研究の中心的な課題を遂行するうえで大きな助けになると思われたことが理由である。

3. 研究の方法

(1) 定義論については、まずはベルクソンのすべての著作を対象に、「定義（する）」という語についての用例をすべて調査し、その分類と分析を行なうことにした。それは、これまでの研究史において、ベルクソンにおける（定義を含めた）知性的認識について言われてきたことの多くが、印象論の域を出ないか、特定の著作や論文（とりわけ「形而上学序説」ならびに『創造的進化』）だけを対象としており、そのせいで、一面的かつ解像度の低い成果しか挙げえていないように思われたからである。なお、その際に、定義という営みを批判した他の哲学者たち（デカルト、カント、ムーアなど）との比較や、定義を重視し、定義について一定の考察を行なった哲学者たち（とりわけスピノザとライプニッツ）との比較を行ない、ベルクソンを新しい仕方でも哲学的に位置づけること、また、そのことをとおして、ベルクソンの独自性を新しい仕方でも取り出すことを心掛けた。

次に、その成果を踏まえて、自由の定義不可能性についてのベルクソンの主張を検討した。この検討に際しては、ベルクソンの著作に加えて、彼の講義録についても調査を行なった。また、ただ歴史的に跡づけたり、この主張のニュアンスを汲みとったりすることにとどまらず、自由が定義不可能であることを示すベルクソンの議論をできるかぎり明快に再構成することを試みた。

(2) 道徳論について。まず、テキストとしては、ベルクソンが『二源泉』第一章で、彼が主知主義的道徳哲学と呼ぶものを批判している箇所を対象とした。また、同時代の対比項として、ベルクソンと類似した議論を数十年も先駆けてしていた、レヴィ＝ブリュール『道徳と習俗科学』を取り上げた。

そのうえで、両者の内容をまとめ、その違

いはどこにあるのか、また、その違いによって、それぞれの批判全体にどのようなさらなる違いが生まれているのかを検討した。

最後に、その検討の成果を踏まえつつ、ベルクソンによる主知主義批判を、道徳的行為者の成立要件についての理論として読み替えて、その理論において自由や自我といった概念がどう関係しあっているかを考察した。

(3) 記憶論については、『物質と記憶』における潜在性概念の検討を主要な目的とした。先述のとおり、潜在性概念をベルクソン解釈の中心に据えたのはドゥルーズである。そこで、まずはドゥルーズにおける潜在性概念を簡単に検討し、それと適宜対比させながら、『物質と記憶』で登場する潜在性概念を分析し、それがどのような理論的な重要性をもっているのかを明らかにした。

この論点についても、これまでの研究においては、ベルクソンのテキストから断片的な発言を取り出し、文脈をあまり考慮せずに恣意的な意味を読み込む傾向が強かった。そこで本研究では、ベルクソン『物質と記憶』について、さらにはドゥルーズ『ベルクソン哲学』についても、「潜在的」や「潜在性」という単語の用例を網羅的に取り出し、文脈や、登場している議論の全体像も考慮しつつ、その意味を確定した。

最後に、ベルクソンの論文「可能なものと実在的なもの」における可能性概念についても検討を行なった。ドゥルーズは潜在性概念を可能性概念と対比させつつ提示しているため、潜在性概念のドゥルーズによる解釈を批判的に検討していくためには、ベルクソンにおける可能性概念についてもあわせて考察する必要があると思われるからである。

4. 研究成果

まずは近世哲学研究成果を要約し、そのうえで、(1) 定義論、(2) 道徳論、(3) 記憶論について順に成果をまとめる。

まずデカルトについては、彼の倫理学という枠組みのなかで自由論の検討を行なった。デカルトは、自由意志の価値を称揚し、道徳や幸福のほとんどすべてについて、その基礎は自由意志の行使にあるとした。このことは彼の倫理学の最大の特色であり、かつ倫理学一般に対する最大の貢献であると言える。ただし自由意志をこのように称揚することは、デカルト哲学においては、価値判断の明証性という概念と密接な結びつきのもとにあり、この概念は倫理的には多くの問題をもっている。すなわち一方ではこの概念は、価値判断が真でありうることを保証するために導入されているのだが、他方では価値判断についての開かれた対話を阻害しかねないものでもあるのである。最後に、以上を踏まえ、デカルト以降の近世哲学の歴史をこの問題への対

処として捉える可能性が示唆された。

次にパスカルについて、「パスカルの賭け」称される議論を検討した。この議論は、神の存在証明や、教義の正しさの証明などではなく、合理的に考えれば信仰したほうが利得が大きいことの証明と考えられている。すなわち、合理性によって信仰の利得を証明し、自らの自由意志によって信仰を選ぶよう促す議論、というわけである。それは一面では正しい。ただし、今回の検討で明らかになったのは、賭けの議論が、人間の自由意志、習慣による信念ないし信仰の形成、そして神の恩寵という、三つの複雑な絡み合いのなかで構築されていることである。

なお、以上の検討のなかで、両者における理性概念や定義論、自由概念と自我概念との関係についての考察も行なった。

(1) 定義論について。定義についてのベルクソンの考え方は、おおよそ次の二つの主張からなる、と一般には考えられている。すなわち、第一に、定義するという営みは哲学にとって重要ではなく、不要ですらある。それはなぜなら、第二に、実在は絶えざる生成変化のうちであり、定義することができないものだからである。

しかし本研究では、ベルクソンのテキストに登場する用例の綿密な検討をとおして、次のことを明らかにした。すなわち、ベルクソンはその著作のなかでさまざまなものについて定義を行っており、必ずしも定義を否定的に捉えてはいない。また、何かが定義できないと主張するときに、その対象が生成変化しているからという理由が挙げられることはあまりない。さらに、何かが定義不可能であると主張される際には、定義に対して過剰に高いハードルが課せられているか、対象があまりに単純なので見知りによってしか知りえないという理由が述べられることが多い。そして最後に、定義不可能性の理由としていま挙げた二つは、どちらも近世哲学における定義論から引き継がれたものである。

次に、以上の成果を踏まえて、「自由は定義できない」というベルクソンの主張の解明を行なった。『直接与件』における用例の網羅的な調査と考察により、次のことを明らかにした。すなわち、自由が定義不可能であることの一つの理由は、上記の定義論で挙げた二つの理由のうちの一つ、自由が何であるかは直接的な見知りによってしか知ることができないというものである。また、直接的な見知りによってしか知ることができないものは定義できないという主張を、申請者は「認識論的還元的要請」と名付け、この歴史的起源や妥当性についても一定の考察を行なった。

(2) 道徳論について。レヴィ＝ブリュールによれば、これまでの道徳論はすべて次の三つの点において誤っている。すなわち、第一に、規範的命題を学問 (= 事実命題の集合)

に含まれると考えている点、第二に、知的判断によって道徳を基礎づける（＝道徳的行為へと人びとを動機づける理論を知的判断だけで構成する）ことができると考えている点、そして第三に、人間本性が世界のあらゆるところで、かつ歴史上もずっと変化していないと考えている点である。こうした批判をしたうえで、レヴィ＝ブリュールは、さまざまな社会における習俗についてのいわば人類学的な研究を称揚し、それによって道徳の発生を辿るべきだと主張する。

対してベルクソンは、上記の第一点と第二点については同様の主張を行なうものの、第三点についてはむしろ逆に人間本性の共通性を強調する。これは彼の、いわば生物学主義（「道徳もまた生命現象の一つとして考えるべきである」といった考え方）の現れの一つであるが、この生物学主義が同時に、道徳における知性の位置づけが極めて低いことに繋がっている。すなわちベルクソンによれば、少なくとも行為者の自由を要件とせずに成立するような道徳的行為者にとっては、知性を備えていることは要件ではなく、さらには自己意識を備えていることさえ必要ではないのである。こうして、自由であることと自我であることとの密接な繋がりが、道徳的行為者という個別例において、間接的な仕方ではあるが示されたことになる。

(3) 記憶論について。ドゥルーズ『ベルクソン哲学』によれば、潜在性は創造と強く結びついており、また、可能性と対立関係にある。しかし実際にベルクソンのテキストを調査してみると、この解釈はテキスト上の根拠をほとんどもっていないことが分かる。ドゥルーズの言うような意味で読むことのできる「潜在性」や「潜在的」の用例は、ほぼ存在しないのである。

ではベルクソン自身は「潜在的」という語をいかなる意味で用いているのか。それは、議論の文脈によって、大きく二つに分けることができる。すなわち、第一には、『物質と記憶』第一章における知覚論において、とりわけ「行動」を修飾するという代表的な用いられ方があり、その際には「可能な」というのとほぼ同じ意味をもつ。そしてこの用法は、ベルクソンの知覚論の基本的な主張を言い表すためのものであり、その意味で、理論上重要な役割を担っている。

また第二に、『物質と記憶』第二章と第三章で、記憶の本質的なあり方を修飾するという用いられ方があり、この際には「意識に現前していない」という意味をもつ。そしてこの用法もまた、記憶の存在証明や、外界の存在証明といった、『物質と記憶』の主要な目的を進めていくうえで重要な役割をもっており、決して等閑視されてはならないものである。

最後に、ドゥルーズが「潜在性」と対立させている「可能性」について、ベルクソンがどのような主張を行なっているのか、またそ

の際にどのような議論を行なっているのかを検討してみると、ドゥルーズのように看做すのでは見落とされがちなくつかの論点や議論が存在することが指摘できる。

要するに、ドゥルーズの解釈は、ただ語釈のレベルで間違っているというだけではなく、ベルクソンが行なっているさまざまな議論を見えにくくさせるという効果をもっているのであって、その点には十分注意しなくてはならないのである。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計5件)

Tatsuya MURAYAMA, 'Bergson's Concept of Virtuality', International Colloquium, 'Diagnoses of Matter and Memory. Bergson and the Problem of Brain, Time and Memory', 2016年11月10日, 法政大学.

Tatsuya MURAYAMA, « Deux versions du pari », Journée internationale d'études et de dialogues, « Le spectacle de l'autre : voyages et transferts culturels entre France et Japon », 2016年10月7日, Université Grenoble Alpes (France).

Tatsuya MURAYAMA, « La théorie bergsonienne de l'agent moral », Journée d'études franco-japonaise, « Morale et la philosophie française », 2016年3月21日, Université de Strasbourg (France).

村山達也「自由はなぜ定義できないのか：ベルクソン『意識の直接与件についての試論』をめぐって」, ベルクソン哲学研究会, 2015年9月6日, 東北大学.

村山達也「実感についての二つの実感」, フランス哲学セミナー, 2014年10月31日, 東京大学.

〔図書〕(計3件)

平井靖史, 村山達也(他)『ベルクソン『物質と記憶』を診断する』書肆心水, 2017年(印刷中).

座小田豊, 村山達也(他)『自然観の変遷と人間の運命』東北大学出版会, 2015年, pp. 27-54.

村山達也(他)『文化理解のキーワード』東北大学出版会, 2015年, pp. 141-185.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村山 達也 (MURAYAMA, Tatsuya)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50596161

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし